

2026年4月5日 第二礼拝 イースター礼拝

説教題『墓の石は取り除かれ』マルコによる福音書 16 章 1～8 節

主任牧師 加藤 誠

「ところが、目を上げて見ると、石は既にわきへ転がしてあった」(マルコ福音書16章4節)

イースターは喜びの日です。死も暗闇も不安や恐れも、どんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛からわたしたちを引き離すことはできない。人間の罪に対する神の愛の勝利が告げ知らされた日。私たち人間が、十字架につけて墓に葬った主イエスを、神が起こされた復活の日。それがイースターです。

安息日が明けた日曜日の朝、主イエスの遺体が納められた墓に向かった女性たちは驚きの光景を目にします。墓の入り口の石は転がされていて、墓の中に白い衣を着た若者が座っていて、主イエスが神によって復活させられたことを告げるのです。ところが女性たちは震えあがり、正気を失い、逃げ出してしまった。これがマルコによる福音書が伝える、主イエスの復活です。しかし、ここには大切な「イースターの希望」がいくつか示されています。

一つ目「墓の石は取り除かれた」。墓の石は人間の力では動かせない現実の象徴です。その墓の石を「神が」動かし取り除かれた。ここに一つ目の希望のメッセージがあります。私たち人間は、墓の石を動かせない。例えば、死を前に私たち人間は無力です。私たちは死んだ者を生き返らせることはできません。また強い権力、武器を持つ者を前に、人は無力です。排除され、消されるか、屈服させられて言いなりになるか。それが私たちの現実です。けれども「その墓の石を『神が』取り除かれた!」。この希望がイースターの朝、私たちに告げ知らされたのです。

あるテレビドラマで、金の力で人で操り弱い者の命を踏みにじってきたボスに、最後の最後で反旗を翻した男がいました。その男にボスは尋ねます。「俺は金の力でこの国を変えようと思った。お前はこれから何をするつもりだ?」。男は答えます。「シェルトーをつくって家族に捨てられた子どもたちを救う」。「ちいせえなあ。そんなんじや変えられねえよ」と言うボスに男ははっきり答えます。「変えられるよ。よく分かった。でっけえこと言って金や権力に縛られた連中より、小さな家族を必死に守ってる奴の方が強い。俺はそういう強い仲間を増やしてこの世界を変えてやるよ」。

金の力がこの世界を変える。これが毎日わたしが目にしている現実だとしても、「神は」この世界で金の力で踏みにじられ墓に葬られているような小さな一人ひとりを救われる。墓から起こして、立ち上がらせる。人の目に小さく見える者を神は起こし、復活の命に立ち上がらせる。神の愛は人間の罪を覆う。この神の愛を受け取っていく時、世界は変えられる。これがイースターの朝に告げられた希望のメッセージです。

二つ目「墓にイエスの遺体はなく、約束だけが示された」。これは「墓の中に主イエスを探すな、ガリラヤに主イエスを探せ」ということです。私たちは墓の中に主イエスを探して弔いをしようとする。私たちは過去を後悔し、その償いをしようとする。確かに、自分の罪を見つめることは大切です。しかし主イエスに弔いは必要ない。主イエスは「今も生きておられる」からです。だから、主イエスがガリラヤで人々に語られた神の国の福音の言葉をもう一度「聴き直して」みなさい。過去の後悔、悲しみに生きるのではなく、あなたの日々の暮らしの中で、今生きて働かれ、私たちに語り掛けておられる主イエスの言葉を聴いていきなさい。主イエスの言葉は私たちの心の目を開き、私たちの中に復活が起こしていく。私たちは過去を悔やみますが、復活の主イエスは私たちの目を過去ではなく将来に向けさせて、主イエスと共に復活の命を生きるように招きます。ここにイースターの希望の二つ目が示されています。

そして三つ目「復活の出来事に戸惑い、恐れ、震えあがり、何も語れなくなった女性たち」。実は、この姿に希望が語られています。確かにこの彼女たちの最後の姿は頼りなく思えます。大丈夫なのだろうかと不安になります。しかしこの日の朝、墓に向かった女性たちはどうでしょうか。男の弟子たちが打ちひしがれてうずくまっている時に、彼女たちは行動を起こしています。理性で考えるなら「行っただって無駄だよ。自分たちの力で墓の石を動かせるわけがないだろう！」と、そもそも墓になど行かないでしょう。しかし、彼女たちの心は神の愛につなげられていました。頭で「無理だ」と決めつけず、主イエスに何とか香油を塗りたいという、主イエスを愛しく思うその一心で行動を起こし、「必要ならば、神さまが動かしてくれる」という期待を胸に墓に向かうのです。しかしながら天使の若者の言葉があまりに自分たちの理解を超えていたので、正気を失い震えあがります。なんと正直な人たちなのだろうか…と思います。しかし、です。その恐れから彼女たちの信仰の新しい一步は始まるのです。マルコ福音書には、このあとの彼女たちの行動については何も書かれていませんが、キリスト教会がこのあと生まれていったという事実を考えるなら、彼女たちは、大きな恐れにかられながらも自分たちが見たこと聞いたことを弟子たちに伝えたのだろうと思います。恐れて、震えあがり、何も言えなくなってしまう女性たち。その姿は実は私たちの姿でもあるのではないのでしょうか。

私たちの信仰は、ちょっとしたことですぐつまずきます。不安と恐れにかられて簡単に吹き飛ばされ、動けなくなってしまう。でもその小さな者を神は起こし、立ち上がらせていくのです。彼女たちはあまりに思いもがけない復活の知らせに驚き恐れましたが、それは彼女たちを新しい希望の信仰に変えられていく最初の一步だったのです。私たちもどんなに小さな信仰であったとしても、神は御手の中でその信仰を用いていかれる。このイースターの希望に、私たちも生かされていきましょう。